

## 映像メディア英語教育学会 九州支部

### Contents

#### p. 1

巻頭言: 支部長あいさつ

#### p. 2 - 3

支部大会報告

#### p. 4 - 9

映画コラム: 映像メディア  
ショッキング

#### p. 10

会員著書 (新刊) 紹介



## 巻頭言

—石田 もとな (九州支部長)

第 27 回九州支部研究大会は、8 月 23 日 (土) 鹿児島女子短期大学において盛会のうちに無事終了しました。佐賀大学 吉村 圭先生による、「Wendy の多面的女性像と映像化における変容: Peter Pan のヒロイン増の変容に着目した英語文学の授業実践」、岐阜大学 飯田 泰弘先生による「代名詞の理解につなげる英語教材としての映画とドラマ」、京都外国語短期大学 河野 弘美先生による「『ロミオとジュリエット』を通してウィリアム・シェイクスピアの詩的技法を理解する」、鹿児島女子短期大学 石田の「子供の興味を起点とした幼児英語教育の可能性—仮面ライダーカブト変身ベルトの英語表現を事例として」の 4 件の発表がありました。他の支部からも毎年積極的にご発表を頂き、交流ができておりますことを大変うれしく思っております。9 月 27 日 (土) には、東北大学において第 30 回 ATEM 全国大会が「映像メディア英語教育の過去と未来」をテーマとして国際大会として開催されました。国際大会の名前にふさわしく海外からの参加者も多く、また大会テーマにそった未来の英語教育につながる AI を駆使した学習方法の発表もあり、大規模かつ内容の充実した大会でした。

# 第 27 回 支部大会報告



## タイムスケジュール

13:30- 受付開始

14:00- 開会式・支部総会

14:30- 研究発表

- Wendy の多面的女性像と映像化における変容：Peter Pan のヒロイン像の変容に着目した英語文学の授業実践
- 代名詞の理解につなげる英語教材としての映画とドラマ
- 『ロミオとジュリエット』を通してウィリアム・シェイクスピアの詩的技法を理解する
- 子どもの興味を起点とした幼児英語教育の可能性—仮面ライダーカブト変身ベルトの英語表現を事例として

16:35- 閉会式

16:40- 親睦会

18:00- 懇親会

■日時：2025年8月23日（土）

■会場：鹿児島女子短期大学

第27回九州支部大会が鹿児島女子短期大学で開催されました。ATEM初の鹿児島開催でした。当日は4件の研究発表が行われました。同月中の豪雨や直前での台風が発生等、悪天候の影響もありましたが、ご発表、ご参加くださった皆様のご協力のおかげで、無事開催することができました。

## 研究発表



### 1. Wendy の多面的女性像と映像化における変容：Peter Pan のヒロイン像の変容に着目した英語文学の授業実践

—吉村 圭（佐賀大学）

Peter Pan の原作小説とディズニーの映像化 2 作品について、ヒロインのウエンディに着目した比較が行われました。

### 2. 代名詞の理解につなげる英語教材としての映画とドラマ

—飯田 泰弘（岐阜大学・西日本支部）

人称代名詞や指示代名詞における先行詞の有無等、代名詞の不思議な特性について、映画における実際の使用例を踏まえながら解説されました。





## 『ロミオとジュリエット』を通してウィリアム・シェイクスピアの詩的技法を理解する

—河野 弘美（京都外国語短期大学・西日本支部）

William Shakespeare の Romeo and Juliet におけるソネットの詩的技法に関する、授業実践の取り組みが紹介されました。なお、台風の影響により、急遽オンライン形式でご発表をいただきました。

## 子どもの興味を起点とした幼児英語教育の可能性 —仮面ライダーカブト変身ベルトの英語表現を事例として

—石田 もとな（鹿児島女子短期大学）

幼児期における、子どもの興味に基づいた英語学習の重要性について、自身の子育ての経験に基づいたご発表がなされました。



## 親睦会・懇親会

大会後には恒例となった「お土産コーナー」での親睦会と、会場を変えての懇親会が行われました。九州支部らしい、終始和やかなムードの大会となりました。



# 映像メディアショッキング Vol.17

## —映画の名セリフで振り返る英語表現

本号の「映像メディアショッキング」は「映画の名セリフで振り返る英語表現」が共通テーマです。日頃から英語、英語圏文化・文学等の教育・研究に携わる先生方による、映画の名セリフとその英語表現についてのコラムをお楽しみください。



### 中山 奈美 (著者プロフィール)

九州工業大学情報工学部 非常勤講師：1970年80年代の洋楽と猫を愛する。愛猫は10キロ越えのメタボ体形。大学の授業には Authentic な会話のリスニングとスピーキングのトレーニングを取り入れている。

## 映画『Forrest Gump』のセリフから考える人生観と英語表現

—中山 奈美 (九州工業大学)

映画『フォレスト・ガンプ』(1994)は、1950年代から1980年代のアメリカ社会を背景にエルビス・プレスリーやベトナム戦争、ケネディ大統領暗殺、ウォーターゲート事件などの歴史的出来事をコミカルに織り込みながら、人生哲学を問いかける名作である。主人公フォレストの南部訛りの英語はユニークで、大学の授業でも学生に人気のある作品の一つである。

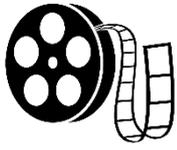
本作で最も有名なセリフといえば、フォレストの母親が彼に言ったこのセリフだろう。"Life is like a box of chocolate. You never know what you're gonna get." (人生、開けてみるまで中身が分からない)。これは人生の偶発性を表しており、更に、"You have to do the best with what God gave you." (神様が与えてくださったものでベストを尽くさない) 与えられた環境の中でいかに「選択」し「努力」することが大切かを説いている。

一方で、「運命」に縛られるダン中尉のセリフは、"I was supposed to die in the field! With honor! That was my destiny! (俺は戦場で名誉と共に死ぬはずだった) や、"We all have a destiny. It's all part of a plan!" (俺たちには運命がある) は「宿命」を強調しているが、映画の中盤にはその信念にも変化が見られる。"He never actually said its name, but I think he made his peace with God." (フォレスト：神様と和解したんだと思う)

そして映画終盤、フォレストが亡き妻ジェニーの墓前で語るセリフは、この映画のテーマを鮮やかに総括している。

"I don't know if Momma was right or if, if it's Lieutenant Dan. I don't know if we each have a destiny, or if we're all just floating around accidentally-like on a breeze, but I, I think maybe it's both. Maybe both is happening at the same time." (運命に導かれながらも、風に吹かれるように自由に生きる) という深い心の境地へとたどり着く。映画のオープニングとエンディングに登場する「feather (羽根)」はこのメッセージのメタファー (比喩) として映画を締めくくり、人生を肯定する勇気を私たちに与える。

—中山 奈美 (九州工業大学)



## 映画「仮面の男」における“*One for all, all for one.*” の変化

—石田 もとな（鹿児島女子短期大学）

石田 もとな（著者プロフィール）

鹿児島女子短期大学准教授。大学教員になる前は、航空業界において客室乗務員・地上職員を経験。ギリシャの航空会社で客室乗務員をしていたため、ヨーロッパが舞台となる映画に興味を持つことが多く、世界遺産や映画の舞台の聖地巡礼が旅行の楽しみの一つとなっている。鹿児島トクサツ研究会に所属しており、ウルトラマン・仮面ライダー等の特撮が趣味。

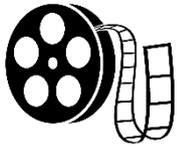
“*One for all, all for one.*”は、映画「仮面の男」の名セリフであり、由来は、アレクサンドル・デュマの小説『三銃士』である。

*One for all, All for one* というフレーズは、一般的には、「一人は全員のために、全員は一人のために」と訳され、主にラグビーなどのスポーツ、チーム活動で重要な精神を表現する言葉として使われている。また近年ビジネスの場でも使われるようになり、「みんなで一つの目的を達成する」ことを意味する言葉として、協働の精神を表すために使われるケースも増えてきた。映画「仮面の男」の前半においては、主要な登場人物たちがこのフレーズを使って、絆を確かめたり、互いのために尽力し合う姿勢を表したりする場面がみられるが、後半におけるこのフレーズの意味は、「皆でひとつの目標を達成する」に変わっていったように思う。アトス・ポルトス・アラミスの三銃士は、国民を顧みず冷酷非道な王ルイと双子の弟でずっと鉄仮面を被せられ幽閉されていた心優しいフィリップを、仮面舞踏会の最中に入れ替えることを決意した。しかし固いきずなで結ばれたはずの仲間ダルトニアンは、王を裏切ることはできないという。実はダルトニアンはフィリップの存在を知らなかったが、ルイとフィリップの実の父親であった。入れ替え計画が失敗し、フィリップが捕らえられて初めて、その存在と今までの苦勞を知ったダルトニアンは苦悩の末、フィリップがいる牢の場所と牢番の交代の時間を「フィリップを救え」というメッセージと共に4人の秘密基地に残す。ルイの軍隊に取り囲まれた際、「自分を差し出して命乞いをしてほしい。」というフィリップを制し、全員で戦う覚悟を決めた際にフィリップも含めて剣先を合わせての“*One for all, all for one.*”は圧巻であった。

沢山の洋画を見てきたが、ワンシーンだけであれほど感動し、憧れを掻き立てる作品を筆者は他に見たことがない。国民を巻き込まず、最小限の犠牲で、ある種の「革命」を成し遂げようとする彼らは、まさに一つの目的に向かう同志であった。

ルイの刃からフィリップをかばい、刺されたダルトニアンを見て、ルイに切りかかるフィリップに対し「よせ。お前の兄だ。」と諭した後、“*One for all, all for one.*”という言葉で最後に絶命したダルトニアン。最終的にルイは自分が連れてきた軍の将軍に裏切られる。彼はフィリップに対し「私が仕えたかったのはあなただ。」といい、ルイは鉄仮面を被せられ幽閉される。フランスに実在したといわれる鉄仮面の囚人の存在と、若いころは身勝手だったにも関わらず、次第に良政を行うようになったといわれるルイ14世の変化をもとに想像で作られた作品であるが、“*One for all, all for one.*”というフレーズの意味を深く考えさせてくれる名作といえよう。

—石田 もとな（鹿児島女子短期大学）



## 吉村 圭（著者プロフィール）

佐賀大学教育学部准教授。専門はイギリス児童文学とその映像化。近年は、A.A.ミレンの『クマのプーさん』やロアルド・ダールの『チャーリーとチョコレート工場』のアダプテーション研究に注力している。現在二児（6歳、3歳）の育児に日々奮闘中。

# 『陽の当たる教室』（1995）に見る「教師」という生き方

—吉村 圭（佐賀大学）

私は学生時代に教職課程どころかアルバイトでさえ教育経験がなかったので、初めて非常勤講師の仕事をお願い授業を担当したときは、文字通りその辺を歩いているあんちゃんがいきなり教壇に立たされた状態だった。当然授業で何を話したらいいかも、何をしたら学生が楽しく学べるのかも分からない。最初の1年は、不安と緊張で授業前にお昼ご飯が食べられないような生活を送った。自分自身がそんな教員人生のスタートだったので、映画『陽の当たる教室』（Mr. Holland's Opus, 1995）は妙に私の心に刺さる。

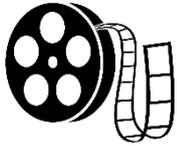
この映画はグレン・ホランドが高校の音楽教師になり、引退するまでの30年間の半生を描く。グレンはもともと作曲家になることを志望していたのだが、それだけでは十分な収入が得られないため、やむなく高校の音楽教師になる。しかしそんなモチベーションで始めた教師の仕事は、当然思うようにはいかない。彼が担当する音楽理論の授業では、生徒たちはいわゆる「目が死んだ」状態。大あくびをし、誰一人まともに授業を聞いていない。また器楽の授業では、生徒たちのあまりにもひどい演奏に思わず頭を抱える。中でもひととき演奏技術の低いクラリネットのガートルードとは、個別に時間を取ってレッスンを行うことになる。授業を担当してもつらいことばかりで、音楽家として作曲に充てる時間も個別レッスンに奪われてゆく…。そんな境遇に嫌気がさしたグレンは、生徒たちを嫌い、仕事への不満を募らせていく。

しかしそんなグレンの心境に、妻が妊娠したことで転機が訪れる。自分自身の生涯を振り返ったグレンは、かつて自分が音楽に「恋」した日のことを思い出し、その喜びを生徒たちに伝えようとしてこなかった自身の非に気づくのだ。そしてグレンは授業に対する考え方を変える。彼は、当時流行していたトイズの「ラバーズ・コンチェルト」がバッハの「ト長調のメヌエット」から作られていること、講義で繰り返してきた「音階」（スケール）の話が、実は生徒たちが夢中になって聞いているロックンロールとつながっていることを、演奏を交えながら伝える。そうすると、生徒たちはきらきらした目でグレンの講義に耳を傾けるようになる。そして授業に喜びを感じるようになったグレンは、ようやく真の教育者としての第一歩を踏み出すことになる。

しかし、グレンが授業でロックンロールを題材としていることは、学校で問題となる。校長からそのことで考えを問われたとき、グレンは言う——「私は生徒たちに あらゆる音楽を教えます ベートーベンからビリー・ホリデイ ロックンロールまで 音楽を愛する心を 育む助けになるなら」(I will use anything from Beethoven to Billie Holiday to rock and roll) <0:36:02>。このセリフには、生徒の成長を喜びとする教師としての自信と情熱が集約されている。そこにはかつての迷える半人前教師の姿はもはやない。

ところで、卒業式の場面で映る横断幕から、この場面は1965年のできごとだと分かる。それはイギリス産のロックが世界を席卷した「ブリティッシュ・インヴェイジョン」の時代。ビートルズが「ヘルプ!」「イエスタデイ」、ローリング・ストーンズが「サティスファクション」をリリースした年である。時代はまさにロック全盛期。しかし若者たちが熱狂するほどに、当時の大人はロックという音楽を忌み嫌った。「必ずロックンロールは悪魔の音楽だという非難が」<0:35:50>というのが当時の一般的な風潮だったといえる。60年代当時にロックを授業で扱うということの意味は、ロックが「大人のたしなみ」となった現在とは大きく異なる。「私は生徒たちに あらゆる音楽を教えます ベートーベンからビリー・ホリデイ ロックンロールまで 音楽を愛する心を 育む助けになるなら」——このグレンの言葉は、その批判さえも受ける覚悟で生徒の育成に挑む決心をした、教育者グレン・ホランドの誕生を表す名セリフだといえる。

—吉村 圭（佐賀大学）



## うまいかねば馬を見よう

—秋好 礼子（福岡大学）

### 秋好 礼子（著者プロフィール）

福岡大学人文学部英語学科所属。専門は19世紀アメリカ文学で、当時の新聞や雑誌の記事を読むのも好き。趣味はスポーツ観戦と焼き鳥店巡り。

朝起きたらまずテレビをつける。家に帰ったらまたまずテレビをつける。そんな生活を送っているある日、競馬のCMが存外頻りに流れるということに気づいた。競馬ファンの人口がいかほどかは全く知らないが、食器洗剤を使う人の数より少ないことはまちがいあるまい。さすれば競馬と縁のない人はどんな思いでこのCMを見ているのだろうか。私はある映画を思い出す。それが『シービスケット（Seabiscuit）』（2023）だ。

舞台は世界恐慌に苦しむ1930年代アメリカ。生活苦のために親に里子に出され、騎手になったものの賭けボクサーをしてようやく食いつないでいるレッド、事故で息子を失い、妻も去ってしまった実業家チャールズ、自動車の普及のため仕事なくなった元カウボーイで、人となじめないトム—人生がうまいかない3人の男たちが、気性が荒く足が曲がった小柄な馬、つまり競走馬としてうまいかないシービスケットと出会い、家族以上の強い絆で結ばれ、次から次に降りかかってくる不幸なできごとの最中にあっても、その度ごとに希望を見い出し、強く生きて行く物語である。否、これは物語ではない。実話に基づいているから、より驚きと感動が増す。

最初から勝てたわけではない。ようやく、ただし勢いよく連勝するようになったシービスケットの取材に来た記者団を前に、ハワードはこう言う。

Well, I just think this horse has a lot of heart. He may have been down, but he wasn't out. He may have lost a few but he didn't let it get to him. We could learn a lick or two from this little guy. Oh, by the way, he doesn't know he's little. He thinks he's the biggest horse out there. (1:08:23-1:08:38)

この直後のシーンで映し出される、競馬場の最安スペースを埋め尽くすともなく大勢の人々、そしてそれを見る馬上のレッドの表情にぜひご注目いただきたい。

小柄な馬の快進撃は、生活苦に喘ぐ大勢の人々の希望になる。集まった人々を前に、ハワードは笑顔で “Our horse is too small. Our jockey is too big. Our trainer is too old. And I'm too dumb to know the difference.” (1:25:28-1:25:38) と言う。業界的にダメダメ三銃士を何があっても見捨てないハワードだが、彼自身もどうしようもない時に負傷馬の世話をするトムとの会話で救われた男だ。

Charles: Will he race?

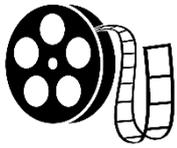
Tom: No. Not that one.

Charles: So why are you fixing him?

Tom: Because I can. Every horse is good for something. He could be a cart horse or a lead pony. And he's still nice to look at. You know, you don't throw a whole life away just because he's banged up a little. (0:41:15-0:41:53)

「ちょっとけがしたからって、人生丸まる投げ出すことはない」—この言葉は、いつの時代もつらい状況にある人に寄り添ってくれるだろう。午年の今年、美しい映像と共にこの映画を楽しんでみては？

—秋好 礼子（福岡大学）



## 英語ビギナーにお勧めフレーズ

### 「乾杯～ to what? to whom?」

—松尾 祐美子（宮崎公立大学）

#### 松尾 祐美子（著者プロフィール）

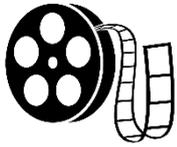
宮崎公立大学非常勤講師。音楽畑から文学畑へと植え変わり、その挙げ句に、再び音楽（今回は JAZZ）へ回帰中である。JAZZ の歌詞とその背景などいろいろと興味を惹かれるところが多いのが魅力のこのジャンルに、音楽と英語の両刀で切り込んでみたいと考えている。

字幕翻訳の話がしたいのではないが、「君の瞳に乾杯」という台詞（高瀬鎮雄氏訳）を耳にした方はたくさんいらっしゃるでしょう。原文は “Here’s looking at you, kid”。イングリッド・バーグマン (Yvonne) とハンフリー・ボガード (Rick) が共演した “Casablanca” の台詞です。1941 年製作のこの映画の背景は、第二次世界大戦下の仏領モロッコ、カサブランカ。ここはナチスの台頭により混迷するヨーロッパを逃れ、アメリカに渡ろうとする人の中継地となっています。作品中では Rick と突然音信を絶った元恋人 Ivonne の再会と別れが描かれますが、実は前出の台詞は作品中に 4 回登場しています。パリ時代の場面で 2 回、カサブランカで 2 回。場面ごとの使われ方を見るのもまた一興でしょう。

それにしても、この台詞のどこを見ても「瞳」など見当たらないのになぜこうなった？と疑問に思う方は多いでしょう。日本で配給になったのは 1946 年、当時 30 歳の高瀬氏の訳ですが、高瀬氏は、翻訳される国の環境で同じ意味を持つ概念に置き換えることが大切だと主張していたそうで、言葉を捨てて意味をとることが肝要なのだと私なりに推察しています。ともあれ、これが洋画の台詞の邦訳であるからこそロマンチックにも思えますが、筆者などはこの言葉を直接言われたとすると体中が痒くなりそう。ここまで気障（もしかして死語？）な文句を発することができる日本人はいらっしゃるか、とまで思ってしまう。

さて、翻訳について語るのが目的ではないので話を英文に戻しましょう。英語での乾杯の場面では “make/have a toast”、“Cheers!”、“Bottoms up” などの表現があります。“Here’s to you.” として乾杯の対象を入れたものもあります。そこへ、“looking at you” --君を見つめながら-- を入れたわけですね。カッコつけてる～、とかドン引きするとか、キモいなどと言わず、素直な気持ちで “Here’s to ~” の表現を覚えてください。“Here’s to your bright future,” “だとか” Here’s to our success” など祝福の場面で使われることが多い、したがって覚えていると役立つフレーズです。この一言を添えるだけで、こなれ感がぐんと上がるのではないのでしょうか？乾杯のシーンで掛け声をかけることがあったら、ぜひ使ってみてください。

—松尾 祐美子（宮崎公立大学）



## “Good Will Hunting”

### ～タイトルの二つの意味～

－村田 希巳子（北九州市立大学）

#### 村田 希巳子（著者プロフィール）

北九州市立大学非常勤講師。

19世紀アメリカ文学専攻。

主な著書：

『ユダヤ系アメリカ文学のすべて』（共著、小鳥遊書房、2023年）

『Sachiko : A Nagasaki Bomb Survivor's Story』（共著、英宝社、2022年）

『身体と情動—アフェクトで読むアメリカ・ルネサンス』（共著、彩流社、2016年）

『環太平洋の想像力』（共著、彩流社、2013年）

映画『グッド・ウィル・ハンティング』には数々の名言が使われており、それらが見事にウィルの旅立ちを後押しする言葉となっている。主人公のウィルは数学の天才だが、幼い頃に父親の暴力を頻繁に受けて心に大きな傷を負い、喧嘩速いにもかかわらず人を信じていることができないため、恋愛も続けられないし、就職することもできない。けれども彼は数学の才能を見込まれ、心理学者ショーンからカウンセリングを受けることになる。ウィルははじめショーンをひどく傷つけるが、それでも辛抱強くカウンセリングを続けるショーンと、次第に信頼関係を築いていく。ウィルはハーバード大学の真面目な学生スカイラーと恋に落ちる。けれども自分に自信のないウィルが、「もう彼女とは会わない」と告げたとき、ショーンは素敵なアドバイスを与える。

“You’re not perfect. She isn’t perfect, either. But the question is whether or not you’re perfect for each other. That’s the whole deal.”

（君は完璧ではない。彼女も完璧ではない。でも問題は、君たちがお互いにとって完璧かどうか、ということだ。それが一番大切なんだ。）ショーンに背中を押され、ウィルは勇気を出して再び彼女に会いに行く。そして最後のカウンセリングの日、ショーンがウィルに “It’s not your fault.”（君の落ち度ではない）と何度も繰り返し語りかけ、ウィルの心を解き放ち、自信を持たせる場面は圧巻である。さらに友人のチャッキーからも背中を押される。「もし才能のあるおまえが二十年たってもまだここに住んでいて、俺の家でパトリオット・ゲームをやったり、土方仕事をしていたりするなら、俺はおまえを殺すからな。」

こうして彼はついにスカイラーのもとへ行く決心をし、友達からもらったボロ車で旅立つ。この映画では、スカイラー、ショーン、友人たちが彼の自立を促しているが、タイトルにも大きな仕掛けがあるように思われる。“Good Will Hunting” は「立派なウィル・ハンティング」という意味であると同時に、区切り方によっては “good will” ——人々の善意——を求めてさまようウィル、と読むこともできる。

この作品は、二十歳の天才学生だったマット・デイモンとベン・アフレックが脚本を書き、自ら出演した秀逸な作品である。

－村田 希巳子（北九州市立大学）

## 会員著書（新刊）



### 名誉ある平和：『クマのプーさん』の作家による平和への提言

著者：A. A. ミルン 翻訳：吉村 圭（佐賀大学）

[出版社] 小鳥遊書房 [出版年月日]2026/2/25

『クマのプーさん』を生んだイギリスの作家 A. A. ミルン。第一次世界大戦で従軍し、前線の塹壕戦を経験したミルンは、現代戦争の脅威を知るものとして、切実な平和への願いを本書に込めている。その訴えはミルン作品の通奏低音として、『プー』の物語にも静かに響いている。今の時代にこそ読まれるべき名著、本邦初訳。

#### 吉村 圭（著者プロフィール）

1982年、福岡県生まれ。佐賀大学教育学部准教授。鹿児島女子短期大学、九州女子大学を経て現職。専門は A. A. ミルン研究、及び英語圏児童文学と映像化（アダプテーション）研究。ミルン作の掌編「アルマゲドン」（1914）、一幕劇『少年の帰還』（1918）、短編「帰還」（1922）等、戦争をテーマとしたミルンの著作の翻訳及び研究を行なっている。共著に『字幕で味わう映画の名せりふ』（近代映画社、2022）等、共訳に『スタンド・バイ・ミー—名作映画完全セリフ集』（フォーインスクリーンプレイ事業部、2014）、『サンセット大通り—名作映画完全セリフ集』（同、2011）等。

## 入会案内

ATEM 九州支部では新規会員を随時募集しています。会員登録はホームページから受け付けています。ご不明な点は支部事務局（E-mail）までお気軽にお問い合わせください。



Website : <http://atem.org/kyushu/>  
E-mail : [atem9.office@gmail.com](mailto:atem9.office@gmail.com)